

桜蔭俳話会 三月句会(第三〇三回)桜蔭会館

平成二十四年三月二十五日(日)

【秀句鑑賞】

三月の水に全景金閣寺

貞勝

塔に池を配置した日本の造園技術の粋を極めた景である。「三月の水に全景」という表現は簡潔であり巧い。これに魅かれて掲句を選ばれた方が多かったが、その反面、「水に全景」と静止画像的に平板に切り取ったところに物足りなさを感じた方もいた。水を「三月の水」と特定したからには、「全景」のところに、三月の水の有り様を動態的に表す言葉を入れたい気がする。

【秀句鑑賞】

うがひ液苦し春闘せめぎ合ふ

明美

バブル景気ははじけてから二十年余、労使とも企業の生き残りと生活の維持を目指して、春闘の団交は懸命である。労使馴れ合いの大企業の春闘はともかくとして、不況の最後の帳尻をいつも取らされる中小企業の春闘は、労使とも悲鳴に近い応酬であろう。

せめぎ合う労使の応酬になかに、口腔内細菌とうがい菓の攻防を感じたのであろうか。「苦し」にぎりぎりの苦渋の決断を迫られた者の悲哀がひしひしと感じとれる。

【自句自解】

一山の城取り囲む木の芽かな

守

とある山城が聳えている小高い山の木々は、芽吹きを始めていた。芽吹きは麓から頂上を目指していた。史料によれば、その山城は築城以来一度も戦火に会わなかった城であるが、いまや木の芽が城を取り囲み、鬨の声を上げて山城に攻め上って行くように感じられた。

【秀句鑑賞】

春眠の遠きラジオのとぎれをり

ツル子

ラジオをつけながら仕事や勉強をしているうち、いつしか睡魔におそわれる。眠りの深さによってラジオの音は遠くなり途切れ勝ちになる。最後はラジオをつけたまま深い眠りに落ちる。

掲句の春眠の時間帯が明け方、昼間あるいは夜間であろうと、春眠とラジオを取り合わせたのは絶妙であり、生活の実感がある。齢によるものか、NHKのラジオ深夜便を最近聞き始めた者にとっては、共感するところ大である。

【秀句鑑賞】

花の駅また花の駅降り次ぐ

貞勝

ローカル線を旅するとき、よく出会う光景である。花の駅「また」花の駅とあるので、降り「次ぐ」はいわずもながのことか。降り「けり」、あるいは降り「をり」としても良いかも知れない。

深読みかも知れないが、ローカル線の各駅停車の旅を人生と捉えると、「花の駅」としばしの「停車」には深い感慨を覚える。

#### 【自句自解】

土筆摘む大地のかつて海の底 守

摘み草のため地に身を屈めたとき、ふと得た着想である。水の惑星と美しく形容される地球は、幾多の天体の衝突と火山活動、地殻変動を繰り返して生まれたものである。今は安定した陸地として多くの生命を育んでいる大地も、遠い昔には海の底であったかも知れないと感じたのである。

#### 【秀句鑑賞】

ゆつたりと雲横切りし桃の花 秀一

甲府盆地を例に引くまでもなく桃の産地では、時が至れば、地面は桃の花の絨毯に覆われる。この地に近い空にある桃の花の雲の上には、本物の雲が桃の花の開花をことほぐようにゆつたりと流れている。桃の花にはこの「ゆつたり」の修辞がふさわしい。

#### 【秀句鑑賞】

誰もをらぬ庭に気配よ落椿 友子

大輪の椿は時機が来ると己の葉や小枝を打ちながら、ばさと重い音を立てて落花する。まさに「落ちる」と言うほかは無い落花の情景は、はらはらと散る梅や桜とは別の感慨をもたらす。しかし、掲句は眼前の落椿を詠んだのではなく、音のみに捉えられた落椿を詠んだものである。誰一人いない筈の庭に物の気配を感じた。その気配は音からすれば落椿に違いないとしたのである。「庭に」は「庭の」とすることもできる。

#### 【秀句鑑賞】

ネクタイの結び決まりて入学す ツル子

ネクタイ着用の生活を五十年余続けても、ネクタイ締めは男の厄介な朝の一大作業である。おそらく制服のネクタイを締めるのであるから、これから入る学校は私立の小学校や中学であろうか。本人はもちろん、周囲の大人も総がかりで所定の位置に所望の大きさの結び目がやっと決まったのである。入学に至るまでの親の気遣いと子供の努力が、ネクタイの結び目に結実したのである。親子の入学の喜びが「結び」の言葉に端的に表されている。

#### 【秀句鑑賞】

陽春やきりんの立ちて動かざる 真三

掲句はまさに俳句の王道を行く客観写生の句である。作者は以前から眼前直覚の作句に徹し、自分が眼にした情景、その情景から得られた感動そのものにのみ基づいて俳句を詠む人である。気を銜った修辞や気の効いた風の言葉を排する人である。春の陽射しにすくと立つきりんのシルエットが、生きた存在としてくつきり

と目に浮かぶ。きりんが立っている以外の事実は、俳句から見事に切り捨てられているのである。

【秀句鑑賞】

剪定やしずかに空が降りてくる

貞勝

普通であれば、無駄な花芽や枝が切り捨てられた結果、空がすっきりして深く見えること、より直裁的にいえば空が高くなるような感じを受けるのであろうが、作者は「空が降りてくる」と感じている。切り捨てた枝に支えられていた空が、その支えを失って落ちてくるものと見立てたのであろうか。空との関係でもたらされる剪定の効果を逆に捉えたのが面白い。

【秀句鑑賞】

就活の服の中なる卒業子

明美

現代を鋭く活写した一句である。本人の努力にもかかわらず、卒業の時点までに就職が決まらない者が少なからず居る事実。若者の人生の本格的な旅立ちに当たり、希望に満ちた仕事、力量に見合った仕事を提供できないような経済状況は、それに係った先行世代として申し訳ないと思うばかりである。

【秀句鑑賞】

芽柳やわづかの風も見逃さず

友子

芽柳が風を見逃さずに揺れたのであるが、わずかの風に揺れる芽柳を作者が見逃さなかったのである。前の落椿の句と同じように、自然の中の微細な変化を捉えて俳句に表現する、作者の確かな眼がそこにある。

【秀句鑑賞】

連翹の気ままな黄を許しをり

佳史

擬人的ではあるけれども、自由に伸ばした枝を風に揺らせている連翹。その花の黄色を「きままな」黄と断定することによって、連翹に対する作者の思いが良く表現されている。対象に対する的確な観察によって、連翹の一面の本質を表す言葉を得たのである。

【秀句鑑賞】

一政の真鶴岬春の潮

幸

洋画家の中川一正がよく画題に取上げた真鶴岬が作者の眼前にある。その岬の根方は春の潮に白く洗われている。この現実の光景は掲句によって、詠む人のこころの中に鮮やかな映像として定着したのである。

【秀句鑑賞】

ふらここや心変へぬと決めてをり

秀一

ふらここは子供にとって身を空中に揺らして嬉々と遊ぶ単なる遊具である。しかし、ある事の判断に迷う大

人の作者は、ふらここを何度も大きく揺らすうちに、その事にまつわる状況の整理が進み、ふらここが鉛直位置に停止したときには、それまでの迷いが吹っ切れて心が定まったというのである。ふらこの句として新しく、興味深い一句である。

【秀句鑑賞】

畑打の雨吸いし土静まれり

ヤエ子

雨を十分に吸い込んだ黒土に鍬の刃をさくつと入れるときの感じが良く出ている。子供の頃、畑仕事を手伝ったことのある者にとっては、春耕を静かに待っている畑の土、という把握は共感できる。

文責：副代表 増田 守